

水俣病事件報道のロケーション

—1959年から73年のNHKニュース映像分析から

A location analysis of NHK News reports of Minamata disease

西田 善行

Yoshiyuki NISHIDA

法政大学サステイナビリティ研究教育機構

Institute for Sustainability Research and Education, Hosei University

要旨・・・本報告ではNHKアーカイブ스에保管されたNHKのニュースの映像および、それに付与されていたメタデータを分析し、水俣病事件報道のなかでカメラはどこに赴き、そこで何を映したのか、そのロケーションの変遷について検討する。水俣病事件報道は、ローカル・イシューにすぎなかった「水俣」に関する報道が、68年の政府公害認定やその他の公害問題の全国的な浮上を背景として「東京」を舞台としたナショナル・イシューへと変化した。この時重要な役割を果たしたのが川本ら自主交渉患者によるチツソ本社での座り込みへの連日の取材であったと考えられる。

キーワード 水俣病事件報道、ロケーション、NHKニュース、アーカイブ

1. これまでの研究の経緯

「公害の原点」と呼ばれる水俣病は、その問題が全国的に認識されるようになった60年代以降、非常に大きな厚みを持って研究・記述が行われてきた¹。こうしたなか、新聞やテレビなどのマスメディアが水俣病事件をどのように報道してきたのか、その検証は必ずしも多くなされてきたとはいえ、近年小林直毅らの研究によりようやく本格的に進められてきたといえる²。本報告は小林らによる水俣病事件報道の研究をさらに押し進め、水俣病事件報道は何を伝え、何を伝えなかったのかを問うものである。

また水俣病患者には「奇病としての水俣病イメージ、ニセ患者、金の亡者という負のイメージ」³が付与されるが、こうした患者への表象や言説の形成にマスメディアの報道が関わっていることはしばしば指摘されている⁴。調査・分析の制約上の理由からかこうした表象・言説の形成に関する分析にはしばしば新聞や雑誌が対象とされるが、「イメージ」の形成にテレビ報道も関与していることは十分考えられる⁵。

2. 研究目的

本報告ではNHKアーカイブ스에保管されたNHKのニュースの映像および、それに付与されていたメタデータを分析し、水俣病事件報道のなかでカメラはどこに赴き、そこで何を映したのか、そのロケーションの変遷について検討する。

¹ 詳しくは飯島伸子「総論—環境問題の歴史と環境社会学」船橋晴俊・飯島伸子編『環境』東京大学出版会、1998年。

² 小林直毅編、『「水俣」の言説と表象』藤原書店、2007年。

³ 成元哲、「水俣病の被害と差別」鳥越暗之・帯谷博明編『よくわかる環境社会学』ミネルヴァ書房、p148、2009年。

⁴ 関礼子、『新潟水俣病をめぐる制度・表象・地域』東信堂、2003年。

⁵ 藤田真文、「ニュース報道における「水俣」の表象」小林直毅編『「水俣」の言説と表象』藤原書店、2007年。

報道がしばしばある場所と出来事を結びつけ、その場所に一定の意味を付与することはメディアの地理学的分析により指摘されている⁶。テレビニュースがある事件・出来事を伝える際、カメラは出来事の担い手を映し出すだけでなく、しばしばある事件・出来事が発生した場所に赴き、その様子も映し出す。たとえある出来事がすでに終了していたとしても、しばしばカメラはかつて出来事が行われたその「現場」を映し出す。こうした「現場」を伝える映像は、出来事が「どこで」起きたのかを表すものである。このように考えた場合、カメラは出来事が生じている・生じた場所をある一定の空間へと枠づけ、その空間と場所の意味を付与するものといえる。

本報告では、「水俣」病という、特定の地域名が付与され、その場所を強く想起させる事件についての報道が、実際にどこで行われ、カメラは何を映し出したのかを分析することにより、水俣病事件に関するテレビ報道について検証し、カメラが定位する事件報道空間について考察する⁷。とりわけここではチッソによる「見舞金契約」の行われた1959年から、熊本地裁の判決が出る1973年までの水俣病に関するNHKのニュース映像を追うことで、水俣病が問題として浮上し、そのイメージが形成されていく過程について検証することとする。

1959年から1973年のおもな出来事⁸

(1956年5月 チッソ附属病院の細川一院長らが水俣保健所に原因不明の奇病発生を報告。水俣病の公式確認)

1959年11月 不知火海沿岸の漁民が総決起大会。工場に操業停止を申し入れたが拒否されたため、2000人が工場に押し入り、警官隊と衝突。100人以上が負傷する

12月 チッソと水俣病患者互助会が見舞金契約、水俣病患者審査協議会設置

1962年4月 チッソ水俣工場で「安賃闘争」が始まる。市を二分する事態に（1963年1月まで）

1965年6月 新潟水俣病の発生が公表される。原因は昭和電工鹿瀬工場の排水

1968年9月 政府が水俣病を公害認定する

1969年6月 水俣病患者家庭互助会の患者がチッソに損害賠償を求めて1次訴訟を提起

1970年11月 患者たちが一株株主としてチッソの株主総会に乗り込む

1971年7月 環境庁が発足

12月 川本輝夫氏らがチッソ本社で自主交渉を開始

1972年6月 国連人間環境会議が開かれる

1973年3月 1次訴訟の熊本地裁判決。原告が勝訴（確定）

5月 熊本大2次研究班が研究報告を発表。対照地区だった有明海で水俣病と区別できない患者が見つかり、第3水俣病の可能性を指摘

7月 患者とチッソが補償協定を締結。以後、チッソが、認定された患者に1600万～1800万円の補償金などを支払うことに

3. 研究方法

NHKには2009年度末の段階で全国に490万9000件、うち川口のNHKアーカイブスに164万3000件のニュース映像が保管されている⁹。ニュース映像には①発生日局（制作・保管を行うNHK放送局）、②放送日・放送時間・放送区域・収録時間、③副題、④撮影場所、⑤内容などが記されたメタデータも付与されており、その概要を確認することができる。ここではNHKアーカイブスの検索にかかった「水俣」という語を含む1959年から1973年までのニュース映像187件のメタデータから、水俣病との関係が不明なもの¹⁰をのぞく164件について水俣病事件報道の発生日局とそのロケ地の変遷を調べた。さらにニュース映像の中から、川口のNHKアーカイブスに所蔵されている113件（256シーン・7時間29分50秒）の映像を分析し、それが映されている場所・映された人物・映像についてシーン毎に記録した。確認できるニュース映像の多くは素材であり、音声も入っていないものが多くあ

⁶ Burgess, J. A. 'The Misunderstood City', *Landscape*, 25, 20-27, 1981.

⁷ 本報告では「ロケーション (location)」を単に取材場所という意味だけでなく、カメラによって定位 (locate) された出来事の起きている空間という意味でも用いている。本報告と同様の視点でテレビニュースを分析したものとして、Yanichi, D. 'Location, Location, Location: Urban & Suburban Crime on Local TV News.' *Journal of Urban Affairs*, 23, 3-4, 221-241, 2001.

⁸ 高峰武編『水俣病小史』熊本日日新聞社、2008年。

⁹ NHK放送文化研究所編、『NHK年鑑2010』日本放送出版協会、2010年。

¹⁰ うち22件が1962年のいわゆる「安賃闘争」に関する映像であった。

る。そのためどのように放送されたかを確認することはできないが、少なくとも取材班が水俣病事件のどこで起きていると認識し、何をとらえようとしたのかは明らかになる。

4. メタデータから得られた知見

4-1. ニュース映像の放送年別の推移

表1からニュース映像の放送年ごとの件数の推移をみると、1959年には7件の記録があるが、その後1963年から66年は0件となりいわゆる「停滞期」のニュース映像が残されていないことがわかった。その後1970年以降急速に増加し、1972年が58件と最も多くなっている。この結果は朝日新聞¹¹や熊本放送¹²など、他の報道量を調べた調査と同様である。

発生局別では東京が113件と最も多く、福岡と鹿児島島の九州が30件でそれに次ぐ¹³。東京以外を発生局とする映像のほとんどが県別あるいはブロック別のローカルニュースであるため、東京で報じられたのは全体の2/3程度となる。

表1「水俣」をキーワードとしたNHKニュースの放送年別件数（所蔵地域別）

放送年	1959年	1960年	1961年	1962年	1963年	1964年	1965年	1966年	1967年	1968年	1969年	1970年	1971年	1972年	1973年	合計
東京	7	1	1	0	0	0	0	0	2	2	3	15	14	48	20	113
九州(福岡・鹿児島)	0	1	0	2	0	0	0	0	0	0	1	10	6	2	8	30
その他	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1	6	8	5	21
全番組	7	2	1	2	0	0	0	0	2	3	4	26	26	58	33	164
その他										松山1		大阪1	大阪6	名古屋5 大阪3	大阪5	

4-2. 撮影場所の都道府県別比較

表2から水俣病事件報道の撮影場所を都道府県別に見てみると、もっとも多く映しだされていたのが東京都で、のべ112件あった。ただし水俣病報道に関して66年まで東京での撮影は1件もなく、68年の水俣病の公害認定以降増加し、自主交渉患者によるチッソ本社前での座り込みが連日のように取材されていた1972年が46件と最多であった。また東京のなかでもチッソ本社と環境庁、国会などの行政、立法機関のある千代田区での撮影がその多くを占めていた。ここから公害認定以降の水俣病事件報道の中心的場が東京であったことがわかる。

水俣病の発生地である水俣市のある熊本県での撮影は29件と、東京都に比べ決して多いものとはいえない。その中で水俣市の撮影であることが明記され、水俣病事件報道とわかるメタデータは24件あった。さらに水俣市での撮影は1959年が7件と最も多く、半数近くが62年までのものであった。このように出来事としての水俣病報道が水俣の地を撮影場所としていたことは必ずしも多くない。むしろ59年の「見舞金契約」以降、出来事としての水俣病は、水俣を舞台の中心としていなかったことが分かる。また熊本県の他の撮影地としては、熊本市が最も多く、その多くが熊本地裁での裁判の様子を映したものであった。

表2「水俣」をキーワードとしたNHKニュースの放送年別件数（撮影地別/延べ数）

放送年	1959年	1960年	1961年	1962年	1963年	1964年	1965年	1966年	1967年	1968年	1969年	1970年	1971年	1972年	1973年	合計
東京	0	0	0	0	0	0	0	0	1	2	2	21	14	46	26	112
熊本	7	2	1	2	0	0	0	0	1	0	2	6	2	2	4	29
その他	0	0	0	0	0	0	0	0	2	1	1	3	10	11	12	40
全番組	7	2	1	2	0	0	0	0	4	3	5	30	26	59	42	181
その他									神奈川県(1) 新潟県(1)			大阪府(大阪府)(3)	大阪府(大阪府)(3) 鹿児島県(8) 鹿児島県(出水市)(1)	大阪府(大阪府)(3) 三重県(四日市市)(5) 鹿児島県スウェーデン(2)	大阪府(5) 鹿児島県(5) 福岡県(1) 佐賀県(1)	

¹¹ 朝日新聞取材班、『戦後50年メディアの検証』三一書房、1996年。山口仁、『『全国報道』における水俣病報道の表象』小林直毅編『「水俣」の言説と表象』藤原書店、2007年。

¹² 藤田、前掲書。

¹³ 熊本局が1995年以降、新潟局は1981年以降の映像のみが保管されているため、該当期間に両局を発生局とする映像はない。

東京都と熊本県を除いて多いのがチッソの株主総会が行われた大阪府（大阪市）で16件。次に水俣病の被害地である鹿児島県（出水市）も6件となっている。また三重県でも四日市公害裁判との関連で5件となっている。一方、第二水俣病の地である新潟県での撮影は1件であった。東京での撮影なども含めた新潟水俣病の関連が確認されたニュースも述べ8件と、熊本水俣病と報道量に大きな差があることが明らかとなった。

5. 映像から見る「水俣」報道のロケーション

5-1. 「東京」の映像

映像を視聴して分析を行った113件のニュース映像のうち、東京都を撮影地としたのはのべ95件であった。またシーン数は160、合計4時間41分54秒、1シーン平均1分46秒となった。先述の通り東京都が撮影地となったのは1968年以降であり、その多くは1970年から1973年のものである。

このうち最も多く映し出されたのはチッソ本社のある丸の内東京ビルディングでのべ45シーン、1時間11分30秒であった。チッソ本社では1971年12月から1年7カ月に渡る自主交渉患者による座り込みが行われ、その様子が頻繁に映し出されていた。チッソ本社でのシーンではチッソ本社のある4階を見上げる形でビルの外観を映し出すカット（15シーン）と、患者・支援者によりビルの前に立てられたテントおよび「怨」と書かれた黒いのぼり（12シーン）が定型として映し出されていた。また1972年にチッソ本社入口に設置された鉄格子は9シーンで映し出され「閉ざされた場」としてのチッソ本社を象徴的に映し出していた。

またチッソ本社で最も映し出されたのは自主交渉患者である川本輝夫氏（30シーン、0:53:53）であり、川本氏が島田賢一社長（6シーン、0:12:02）や久我正一常務（11シーン、0:24:24）などと交渉を行うシーンや、ハンドマイクを持ち支援者や鉄格子に向かって語るシーンがしばしば登場する。川本氏はのべ67シーン、2時間32分20秒に登場し、すべて東京都でのものだが、チッソ本社で座り込みを始めた1971年12月以前には3シーンの登場にとどまっており、本社での座り込みがいかに水俣病の交渉の様子を注目を受ける上で重要であったのかがわかる。

東京でチッソ本社以外で多く映し出されたのは厚生省（21シーン・0:22:42）や環境庁（27シーン・1:29:41）といった行政機関であり、厚生省での20シーンは1970年5月の水俣病補償処理委員会での一任派の交渉の様子であり、環境庁での22シーンも自主交渉の場や補償協定にむけた調整の場として描かれるなど、行政機関は調整の機関としての意味合いが強い。

5-2. 「水俣」の映像

東京について多い水俣での映像は70シーン、2時間20分1秒あったが、そのうち55シーン、2時間9分15秒は1961年までの映像であり、1959年の「見舞金契約」を境にニュース映像として水俣を見る機会は非常に少ないものといえる。水俣市の映像に特徴的なのが巨大工場としてのチッソ水俣工場であり、正門から見える巨大な煙突、山の上からの全景、空撮など、映像では繰り返し工場がいかに大規模であるかが表現される。また廃水の様子もしばしば映されている一方で患者宅の映像が非常に少ない。

6. 結語

水俣病事件報道は、ローカル・イシューにすぎなかった「水俣」に関する報道が、68年の政府公害認定やその他の公害問題の全国的な浮上を背景として「東京」を舞台としたナショナル・イシューへと変化したと考えられる。この時重要な役割を果たしたのが川本らによるチッソ本社での座り込みであったといえるだろう。

謝辞：本研究はNHKアーカイブス学術利用トライアル研究の支援を得て行われた研究成果の一部です。